



①

1



2

②

静岡県立美術館で古代アンデス文明展が開催中でしたので見学してまいりました。詳細は上の写真①②をクリックすれば拡大してご覧いただけます。

巨大な地上絵で有名なナスカ文化や、謎を秘めた天空遺跡マチュピチュを築き上げたインカ帝国など古代アンデス文明の全体像を約200点の展示資料から窺うことができます。

それでは時代を遡って観てまいりましょう。



③

3



④

4

写真③の右は「ストロンブス貝の殻で作られたトランペット(プトゥウ)」 表面には複雑なデザイン模様が線刻されています。左は「サル人間の図像が彫られた石板」 人と猿の合体という不思議な図像に古代へのインスピレーションが掻き立てられます。(いずれもチャピン文化 紀元前900～500年)

写真④は「自身の首を切る人物の象形鏡(あぶみ)型土器」(クピスニケ文化 紀元前1200～800年) ショッキングな土器ですが、当時の宗教的指導者と想像されます。



⑤

5



⑥

6

写真⑤はクントゥル・ワシ期(紀元前800～500年)に作られた金製の冠や飾り物です。
 写真⑥は「テーヨのオベリスク」(チャピン文化 紀元前900～500年) 高さ4～5mの石の角柱で、ワニやコウモリ、ピラニアなどの動物とピーナッツやサボテンなどの植物が彫られています。当時の世界観を表現したものと思われます。写真⑥のオベリスクの後方の壁にはナスカの地上絵の配置図が掲示されています。



⑦

7



⑧

8

写真⑦は「ネコ科動物の足をかたどりめっきをほどこした爪を付けた土製品」、「ネコ科動物の毛皮を模した儀式用ケープ」、「儀式用ケープをまとった人間型超自然的存在の像が付いた土器の壺」(いずれも後期モチェ文化)
 写真⑧は左から「4つの首が描かれた土製内弯鉢」、「階段状基壇建築の土製ミニチュア模型」、「髪の毛とスポンディルス(貝殻)製のネックレス」(いずれもナスカ文化 紀元前200年～後650年) 4つの顔は首級(斬られた首)か奉納用の首と思われます。人間の首に力が宿っているという信仰はアンデス文明共通のものです。特にナスカ文化では好んで土器などに戦士と首が描かれています。また、希少なスポンディルスは宗教祭祀で重要であったため黄金よりも価値がありました。



⑨

9



⑩

10

写真⑨は「ミラのマント」(ナスカ文化) 色を染めた糸で刺繍を施した目も醒めるような美しい織物。超自然的な精霊を思わせる図柄が織り込まれており、複雑な宗教的世界観が表現されています。

写真⑩は「カラササヤで出土した金の儀式用装身具」(ティワナク文化 後500～1000年)



⑪

[11](#)



⑫

[12](#)

写真⑪は「かみ合う犬歯が生えた髑髏(どくろ)をかたどった銀の葬送用冠」(ティワナク文化)
写真⑫は左から「猛禽類的特徴を持つ神話的存在2体が描かれた土製深鉢」、「3匹のネコ科動物が描かれた土製深鉢」、「パリティ島で出土した儀礼用献酒容器」×2品(いずれもティワナク文化)



⑬

[13](#)



⑭

[14](#)

写真⑬は「土製のリヤマ像」(ワリ文化 後650年～1000年) 牛や馬がいなかったアンデス地域ではラクダ科のリヤマが重要な家畜でした。肉は食用、毛や皮は衣服や織物の材料、骨や腱までもが各種材料として使われました。儀礼や埋葬時の供物としても利用されました。
写真⑭は展示会場内の順路に表示される文化の名称です。年代を追って古代アンデス文明の変遷をたどります。



⑮

[15](#)



⑯

[16](#)

写真⑮は「金の胸飾り」(シカン文化 後800年～1375年) シカン文化を特徴づける金属製品の一部
写真⑯は左から「鉢型の金の器」、「細かい細工がほどこされた金の装飾品」、「打ち出し技法で装飾

をほどこした金のコップ(アキリヤ)5点セット」いずれもシカンの金細工技術の高さが窺えます。



⑰

[17](#)



⑱

[18](#)

写真⑰は左から「2種類の超自然的存在の4つの顔が付いた壺」、「リヤマの頭部をかたどった黒色壺」、「生まれたての仔犬をくわえた親犬をかたどった単注口土器」、「装飾付きの壺」いずれも中期シカン文化の作品です。

写真⑱はいよいよチムー王国(後1100年～1470年)と最後の帝国となるインカ帝国(15世紀前半～1572年)への通路となります。



⑲

[19](#)



⑳

[20](#)

写真⑲は「金合金製の小型人物像(男性と女性)」(インカ文化) 生贄の儀式で子供たちとともに神々に捧げられた小像です。インカ文化といえば黄金を連想しますが、インカを滅ぼしたスペイン人が金を徹底的に狩り集めて融かしてしまっただけで、残っているインカの金製品は比較的小物が主体であり、数も少ないといわれます。

写真⑳は「インカの象徴的なアリバロ壺」(インカ文化) アリバロは饗宴や儀礼時に不可欠なチチャ(トウモロコシ酒)を貯蔵し、運搬し、注いで供するための容器で、インカ特有の土器です。

順路の最後にあるミイラなどの展示スペースは撮影禁止でしたので掲載できませんが、東洋の世界観とはまったく異なる神秘的な空間に投げ出されたような感覚を覚えます。

南米大陸の現在のペルーとボリビアを中心とした地域で、16世紀まで展開した多種多様な文化を総称して古代アンデス文明と呼びます。独自の世界観や宗教、そして高度に発達した技術を持っていたことでも知られ、現代でも多くの人々の関心を集めています。

6月に入り梅雨を迎えるこの時期に、アンデスの乾いた空気に触れてみるのも一興ではないでしょうか。

【古代アンデス文明展】

開催場所：静岡県立美術館

開催期間：2019年5月18日(土)～7月15日(月・祝) ※休館日は毎週月曜日

観覧料：一般1,400円 高校・大学生・70歳以上700円 中学生以下無料

取材：静岡地区担当 生きがい特派員 竹内 章